

H. James の小説における女性像の創造

“Madame de Mauves” 小論

三 輪 誠 一

1

“Madame de Mauves” は James が、1873年、ドイツの温泉地、Bad-Homburg に滞在中に執筆し、翌1874年早々にアメリカにおいて雑誌“Galaxy”に発表した中篇小説である。この作品は“A passionate Pilgrim” (1871), “The Madonna of the Future” (1873) と共に New York Edition, vol. 13 に収められた James 初期の作品の一つであり、上記二作品が批評家によってしばしば取りあげられるように、この作品もまた考察の対象とするのに十分に値すると思う。ただこの作品には批評家を戸惑いさせる箇所があるので、今もなお幾人かの批評家が各人各様の解釈と批判を下している。これは我々の興味をもまた大いに引くこの作品の特異点である。

私はまず“Madame de Mauves”の形式上の構成から説明する。この小説は9章より成る中篇小説であり、ヨーロッパの古典的美術作品を見学するためにパリに来たアメリカ青年 Longmore を視点とし、フランスの貴族 Baron de Mauves と結婚してサンジェルマン（パリの西北西18キロの住宅都市、森と古城のある行楽地）の別宅に住むアメリカ人女性、Madame de Mauves の結婚生活を描いた物語である。この小説は第二章を除き、他の章はすべて Longmore を観察者として展開する物語の主要部分を構成する。第一章においては、Longmore が彼の友人 Draper 夫人の紹介によって Madame de Mauves と相識となる経過が叙述される。第二章においては全知の作者の視点から処女時代の Euphemia Cleve（結婚後の Madame de Mauves）の生立ちと環境、その性格の大略が叙述される。第三章以下終章に至

るまではすべて Longmore が観察者の立場に立って物語を展開する。形式的には Longmore が物語の主人公の座を占めているが、実際の主人公は題名の示す通り Madame de Mauves、即ち Euphemia 自身である。

3

小説の荒筋を述べると、これは女主人公 Euphemia の外に数名の人物を登場させ、Euphemia の不幸な結婚生活を叙述する国際結婚物語である。アメリカの富裕な未亡人 Cleve 夫人の娘 Euphemia は New England に生れ育った後、母親に伴なわれてヨーロッパに渡り、パリの女子修道院に入り、ここで教育を受けて娘時代を過ごす。この修道院はフランスの名家の子供たちが教育を受ける貴族的な寄宿制教育施設である。ここで Euphemia が自分の未来について娘らしい無邪気な空想を抱くに至るプロセスが、第二章において作者を視点として記述される。貴族の家系は、そこに生れる男性が理想的な感情のこまやかさの持主であることを保証するものだ、というロマンチックな信念——これが彼女の未来の結婚について抱く夢想である。彼女の結婚相手は優秀な血統の所有者、即ち貴族でなければならぬと彼女は考え、この結婚条件に未来の幸福を賭ける。彼女は修道院において出会った一人の貴族の学友と特に親しみ、この学友 Mademoiselle Marie de Mauves の兄 Baron Richard de Mauves に結婚の理想の相手を見出し、彼女のロマンチックな夢想は意外に早く実現する。しかし幸福であるべきはずの彼女の夢想はまもなく無残に破れ、彼女は苦い幻滅の日々を送ることになる。夫 Richard 男爵の内に流れるものは確かに貴族の血である

が、それは古い貴族の家系に伝わる頹廢と遊蕩の血であった。彼女がかかる状況にある時、アメリカの青年 Longmore が彼女の前にあらわれる。彼は Draper 夫人から彼女を慰問して欲しいという依頼を受け、しばしば Euphemia をその邸宅に訪れる。彼は彼女の同情すべき境遇にあるのを見て、フランス貴族の背徳と非行に対する怒りと、Euphemia の不幸への深い憐憫を感じる。彼のこの感情は次第に彼女への恋愛感情に変わり、彼女の内にも彼に対する感謝の念と共に彼を受容する愛情が生れる。しかし彼女は宗教的良心、固定観念とも見える強固な克己心によってその感情を圧殺する。それは Euphemia が、彼女への彼の愛情の中に、彼女の現在の結婚生活の解消と、その後必然予想される彼の求婚の願望が暗黙のうちに示されていることを察知したからである。彼女は彼がひそかに抱く願望を婉曲に拒絶する。彼女は自己を受難者として諦観し、殉難の人生行路を歩む余生を選択したのである。彼女は Longmore との永久の別れを決意し、彼にアメリカへの帰国をすすめ、彼との交際を断ち切る。彼女の宗教的良心は、彼女が Longmore に語った言葉が示すように、「頑固なまでに一徹な、堅固不動の良心」、即ち (“I have none [no philosophy],……I believe that I have nothing on earth but a conscience,——nothing but a dogged, clinging, inexpugnable conscience.”) であった。

この物語には次のような短い後日物語がつけ加えられて終局となる。Longmore はアメリカへ帰国後2年間、Euphemia についての消息を全く聞かない。しかしこの時、久しぶりにヨーロッパから友人 Draper 夫人が帰国したことを聞かや、直ちに彼女を訪問し、Euphemia について意外な事件を聞く。Draper 夫人の語る所によれば、Euphemia の夫はその後自己の背徳の罪を悔悟し、Euphemia の前に低頭して彼女の許しと二人の間の愛情の復活を懇願したが、彼女はこれを冷酷に拒否したため、夫 Richard は絶望の果に自殺したという。この報告の最後に Draper 夫人は、Euphemia を烈しく非難する語調で付言する。「彼女はまるで石のように、氷のように冷酷だったのです。彼女は怒れる貞女だったので

す。」 (“She was stone, she was ice, she was outraged virtue.”)

Longmore はこれを聞いて愕然とするが、同時に彼は直ちにフランスへ再びわたり、彼女に求婚しようと思う衝動を感じる。しかし彼は結局この決心を実行することなく止む。作者はこの叙述の後に次の数行を加えて物語の結末とする。「Longmore は彼の胸中に残る Euphemia の温い心優しさの思出の中に、一つの奇妙な感情のあるのを意識した。——それは畏怖と名づけても過言ではない感情であった。」 (“The truth is, that in the midst of all the ardent tenderness of Madame de Mauves, he has become conscious of a singular feeling,——a feeling for which awe would be hardly too strong a name.”)

4

先に私が批評家たちを困惑させると述べた箇所は、上記のような物語の結末の叙述である。Euphemia の夫の死を聞いた瞬間の Longmore の衝動的な決意と、それに続く彼の決意の動揺と実行の躊躇、感情の冷却と決行の中止などの叙述によって James は何を意図したのであろうか。彼の叙述は暗示的というよりは、むしろ ambiguous (あいまいで、多義的) である。それは読者の判断を混乱させる。同時に批評家を困惑させて名人各説という結果をもたらす。批評家たちは James の作品の意図や、作中人物に関連して彼の ambiguity (あいまいさ) をしばしば論ずる。また作中人物に対する彼の ambivalence (同一対象に対して矛盾対立する二感情を同時に抱く心的態度) を指摘する。私はこの作品についての諸批評の中の若干を次に例示する。

5

Christof Wegelin は次のように言う。「我々は James の ambiguity に当惑を感じる。Longmore の感じた畏怖は我々がすでに感じた疑問に近いもののように思われる。Euphemia の貞節は神聖なものか、それとも非人間的のものか。Longmore の感情の冷却は謙遜の表白か、それとも恐怖の表

白か。」Wegelin はこの作品の末尾のあいまいさに即答することをためらうのである。Edward Wagenknecht はこの作品の結末を謎のような結末 (enigmatic ending) と呼びながら、「James は故意に ambiguity を創造しようと試み、それによって読者の思案熟考を要求したのである。さらに考えられることは、多分作者は物語の結末をできるだけ簡潔に処理し、それを単なる既成事実 (fait accompli) として提示することによって (James はその困難を承知しながら) 納得し難いあるものを読者に理解させようと試みたのであろう。」と言う。Wagenknecht はさらに続けて言う。「小説の末尾に叙述された Longmore の消極的行動について言うならば、彼は Euphemia に関しては常に確信がもてなかった。彼が彼女の性格の一面に畏怖という感情を経験したのはこれが初めてではない。それは当然彼の内気、自己卑下の意識、あるいは James の諸作品の中の主人公たちがこのような問題 (love and marriage) に関して示す彼ら特有の確信の欠如を反映すると言ってもよい。(あるいはそれは James 自身の恋愛と結婚に対する ambivalent attitude [正逆相反の二重の感情的態度] の反映と言うこともできよう。)」さらに Euphemia の性格については、Wagenknecht は次のように論ずる。「真の意味において、Euphemia は Longmore よりもなお一層高潔な性格の一面を持っていた。彼女の洞察力は鋭く、もし彼女が彼女自身 (の良心) を裏切るならば、それは必然的に Longmore を裏切ることにもなるということを知っていた。もし彼女が彼の説得 (求婚) を許諾したならば、最終的には彼女は彼故に罪の報いを受けることになったであろう (それが Longmore の意図でないことは確かであるが)、ということは可能でさえあるのである。」最後に Wagenknecht は言う。「結局彼女の良心は、その実行面においては必ずして反抗的性質 (negativistic) のものではなかった。そして Longmore には、彼のためらいの行動のほかに、彼の愛情を汚すことがなかったという慰めがあった、(それが彼にとっていかほどの価値があるかは別として、)」Wagenknecht は Euphemia の性格と行動、良心のきびしさに肯定的な判断を下しているように見える。

次には Kenneth Graham の批評を聞いてみよう。「人間の行動や価値観の中にある ambiguity があるがままに形象化することを芸術的に無意味のこと (artistic meaninglessness) とみてはならない。人生を正確に、しかし人生そのものよりも強烈に、かつ緊密に描出することは、特定の判断を提示することではない。人間生活のより鮮明な展望を提示することが、人生の実相の表現である。その中に判断それ自身はおのずから展開する。これは James の美学の基本的要素の一つである。」

Graham は James の作品が与える印象の中の特異なもの、即ち ambiguity については肯定的の見方をしているように思われる。James 自身もまた人間の行動の動機や、人間の心理が、本来 ambiguous であることを認識し、これがあるがままに表現することを realism の正道と考えている。なお Graham の引用を借りれば、Marius Bewley は Euphemia を Hawthorne の “The Scarlet Letter” の作中人物 Chillingworth と比較し、彼女を “a female Chillingworth, a moralistic avenger” と呼んでいる由である。即ち彼女を道徳的復讐者とみているのである。

Leon Edel はこの作品について、次のような短評を加え、この小説に対する19世紀70年代の読者と、今日の読者との反応の相異を次のように述べている。「James の時代の読者は道徳的非行を犯すフランス人の夫を否定し、Euphemia の立場を異議なく支持したのであろう。しかししばらくの後には、Euphemia のロマンチックな愛の image への自己満足的な執着には当惑を感じないわけには行かない。結局現代の読者は、物語の結末において、ひそかに畏怖を感じる語り手 Longmore に味方したい気持になるであろう。」

6

これらの批評を読みながら、私は Euphemia という女主人公の行動や心理が与える印象とその問題点の考察を試みたい。小説の冒頭において叙述される Euphemia の状況は、美しい結婚の夢が破れ、幻滅の悲しみに耐えて生きる女性の人生の一局面である。彼女はその傷心の痛みを胸中深

く秘め、外面は平穩冷靜の生活を送っているかの如く見えるが、物語の進展と共に彼女の内面の真相が次第に判明する。「私が幸福を見出だそうと夢想したフランスは、今ははるか遠い彼方にあり、今私が住むのは、私の心の中の無名の国です。」と彼女は Longmore に語る。これに対して Longmore は「あなたは純潔と義務と人格の尊敬の正しさを信じておられるが、あなたの住むのはこれらの美德が毎日に裏切られている世界です。」と烈しく語りかける。「あなたは stoicism によってあなた自身を殺している。」という言葉によって Longmore が、この頹廢の世界から彼女が脱出することを暗にすすめるにもかかわらず、彼女は清教主義的な貞節と克己という美德に徹する決意を変えようとしな。この時彼女の感じているのは、「失意の悲しみ」や屈辱感ではなく、むしろ道徳的感情の高揚であろう。それは道徳的な理想をひたすら志向する情熱であろう。ここで私は Euphemia の内面の動きを、心理学的説明を借用して追跡する。

彼女は Longmore に最後の別を告げる時、彼の問いかけ——“Where shall you go? what shall you do?” に答えて言う。“I shall do as I have always done,—except perhaps that I shall go for a while to Auvergne,” これは彼女がサン・ジェルマンの別宅を去り、Mauve 家の本宅の所在地であるオーヴェルニュの田舎に引きこもる意志の表明である。これはまた彼女が外部世界から自己を隔絶することを意味する。(この本宅は、はね橋のかかる堀にかこまれた17世紀の城を住宅とした大きな館である。) 対人関係の疎遠、世間からの疎隔は人間に narcissism の傾向を与える。ナルシズムは他者との結びつき、人を愛する能力を弱める。またナルシズム的傾向を発生させる同じ母胎からは完全欲が生れる。これが固定観念となる時、それは完全の追求へと人を駆りたてる。完全欲がいかなる種類の完全性を欲求するかは個々の場合によって異なるが、Euphemia の場合には、それは清教主義的規範に従って倫理的義務を完全に果すことになる。かくして彼女は貞節、克己などの美德を完全の程度に高めることに人生の意義を見出す。彼女は自己の内部に理想的な人間像を描き、これを無類の美しい自画

像として完成しようとする。完成への努力の成果は、道徳的満足感となり、さらに道徳的優越感につながる。単純なナルシズム的傾向は、この優越感を誇るべき美德として意識し、他から受ける賞讃を楽しむことだけに終るのであるが、強烈な stoicism に生きる人の場合には、優越の意識は、自己の優越をもって相手を傷け砕くという sadism 的衝動を伴うこともあり得る。この衝動はただ他人の過失や欠点を軽蔑する想念を抱くにとどまることもあるが、完全な道徳的な高さから正義の怒りをもって他を打ちたいという強い衝動にもなる。これは洗練されたサディズムの冷酷の喜びとみることができよう。

以上の心理的考察から、我々は Euphemia の性格と心理の一側面を理解できるのではないか。同時にそれはこの作品の謎めいた末尾のあいまいさ (ambiguity) を解く鍵を与えるのではないか。この作品の第七章には、Longmore が女性について抱く想念を叙述する次のような心理描写がある。「女性は測り知ることのできない神秘である。彼女たちの一層すぐれた(精神の)美しさは、その強さにあるのか、それともその弱さの中にあるのか。それは何れとも言いがたい。」これは James もまた常に抱いていた、女性についての想念である。(周知のように、James は生涯を独身で過し、女性の友人を持ってはいたが、公然の恋愛事件は絶無である。これも James の生涯の謎の一つである。)

ここで特に我々の注意を引くのは、彼がこの初期の作品において早くも人間性の深部にひそむ神秘で不可解なものに彼の視線を向けたことである。この作品の制作の時期に James はすでに幅広い西欧的教養を形成していた。またそれまでに彼が New England の清教主義的精神風土の特性を熟知していたことは言うまでもない。

James の人間性を形成した新旧両大陸の対照的な文化の体験と認識は、人間を観察する作家としての彼の眼に鋭敏な洞察力を与えた。彼は Euphemia という一個の女性像を創造するにあたり、彼女の人間評価に性急な判定を下すことを避け、彼女の美德を構成する幾つかの側面を順を追って徐々に具体化した。まず彼女の純真にして温和な心情、敬虔な信仰心の側面を描くことから始

め、順次に彼女の清教主義的良心、堅固な貞節、きびしい倫理的潔癖性を描出した。このように James は慎重に Euphemia の人間像を造型しながら、最後に彼の作家的想像力によって彼女の美德の中に欠如するもの、寛容の精神の喪失を感知する。Euphemia の温和な心性、それと同時に彼女の内面の深部にひそむ宗教的不寛容——これを効果的に物語として叙述するためには小説美学的な配慮を必要とする。私はここで James の用いた表現技法に注目したい。作者はこれを叙述するために Longmore の意識に浮んだ感情の推移を簡潔に描写する。これは作者の好んで用いた、暗示に富んだ間接技法である。James は Longmore の感じたある奇妙な感情——畏怖の感情の発生を語ることによって Euphemia の心理の一側面に光をあてた。これは読者にはじめて彼女

の性格の未知の一面を示したことになる。小説“Madame de Mauves”は後日物語の追加によって終局に到達し、同時に Euphemia の人間像の造型は完了するのである。

(昭和55年10月30日)

Bibliography

- The Complete Tales of Henry James*, with Introduction. ed. Leon Edel, vol. 3.
Graham, Kenneth: *Henry James, The Drama of Fulfilment*.
Wageaknecht, Edward: *Eve and Henry James*.
Wegelin, Christof: *The Image of Europe in Henry James*.
カレン・ホルネイ：井村恒郎、加藤浩一共訳「精神分析の新しい道」日本教文社刊